さらば奉天

北九州市門司区　　中村　洋子

「今朝のラジオは『民族保存、民族保存』と気になることをいっているうえ、正午には重大放送があるそうだが…」と出勤前の父の所に隣のおじさんが顔色を変えて来られた。まさかその日が歴史に残る終戦になるとはつゆ知らず、私達はそれぞれ出かける用意に忙しく、気にはなったが、父は会社へ、私は銀行、妹は女学校からの動員へ出かけた。

昼少し前、小３の末の妹が息せき切って窓口にいた私のところへ、父に召集令状が来たことを知らせに来た。大あわてで帰宅してみると、午後１時に奉天市公署に集合とのことで、父母は急いで支度をしているところだった。あわただしく早めの昼食をすませ、正午の重大ニュースを皆で聞いたが、雑音が入って、よく意味が分からぬまま、それが終戦の詔勅とも知らずバス停へ父を送って行った。が三日程して市の防衛だったと父は無事に帰ってくることが出来て私達をホッとさせた。

いつのころからか、戦局も激しくなっていたことは、うすうす感じてはいたが「我が方の損害は軽微なり」を信じ、神風の吹くことを願っていた私達だった。８月に入って軍属や南満州鉄道社員の家族は疎開をしているという話を聞き、妹の友達は動員から帰宅してみると、もう家族がいなかったという。命令がくれば待ったなしの疎開ということで、我が家もいつそういうことにもなりかねないので覚悟をするように言われていた。だが疎開は１６歳以下という条件なので父、私は当然できない。女学校から部隊に動員に行っていた妹は、年齢は該当するが「部隊が責任を持つので残るように」との命令で、小３の妹とその保護者としての母だけが用意をしていた。いつばらばらになるか分からぬので、一応水杯をしてその日を待った。父の勤めは民間会社なので後回しにされたのか、なかなか指令がこなかった。早く来れば家族が別れなければならないし、複雑な気持ちで落ち着かない日が続いていたときに、父に招集令状が来たのだった。

終戦。災い転じて福となる。遅いとイライラしていたが、結局離れ離れにならずに済んだのは幸運だった。

私が女学校に入った年に太平洋戦争が始まり、卒業してすぐ終戦、まさに戦中時代の女学生だったのだ。楽しい学校生活より、部隊、鉄道工場、看護婦の実習などいろいろな経験をした４年間だった。

終戦後、ソ連の戦車隊が市内に入ってきて急に治安が悪くなり、年頃の女は外に出られなくなった。窓には板を打ちドアにはカンヌキをつけたり、二階の窓からはしごで出入りしたり、坊主頭にもした。夜になると郊外やデパートの焼き討ちで空が真っ赤になった。ソ連兵が来たといって隣組の人たちと戦時中にはあまり入らなかった防空壕に逃げ込んだり、夜も寝間着に着替えてゆっくり寝られぬ日が続いた。「時計が珍しいと取り上げて、腕にいくつもはめてい

る兵隊がいるそうな」とか、ポスターに書かれている女を出せといって困らせるなど、色々話には聞いていたが、何といっても一番恐ろしい思いをしたのは、父が会社に行って留守だった午後のこと。いつもはありったけのお金を分けて、それぞれ腹巻きに入れていたのに、あまり暑いので、はずしておやつを食べている時だった。

急に玄関が騒がしくなってドンドンと戸をたたく音がする。母が立って行ったと思うと「逃げなさい！！」と叫んだ。何かは分からないが、私は窓からはしごで外に出ようとしたが、妹はすぐ押入れをあけて大事なものを隠してある天井裏のフタをあげてスッと上がってしまった。妹は何度か上がった事があるので素早かった。私は初めてなのでまごついて、それでもやっとの思いで上がってフタをしめて、２人でその上に腰かけた。途端にスッと押入れのあく音に息をのんだ。中国人がソ連兵を２、３人連れて、土足で上がってきたのだった。

そのとき天井の壁が私達の重みで少し落ちたらしく、皆の目がサッと上を見上げたとき母は血の気が引いたそうだ。娘を守らなくてはならない親心でおぼつかない中国語で「あれはネズミだ」といったら「そうか」といって品物を物色しだした。母の機転でお金の入った腹巻は難をのがれたが、暑いのでその日脱いで行った父の背広と、除隊のときもらってきたお酒も持って行かれた。そう長い時間ではなかったのだろうが、すごく長く感じられて、しばらくは体のふるえが止まらなかった。

いくらか治安が落ちつき、昼間は私達でも外に出られるようになったので、引揚げ準備のため家財道具を売ったり、衣類は街頭に持って立った。数人の中国人が周りを囲み品定めをする。適当な値段をつけると必ず半分に値切るので、こちらも負けずに掛け引きを覚えた。一番好むのは帯の光ったもので高く売れた。絽の着物などは破れているといって二足三文だった。茶碗は風流ないびつなものは「ホワイラ」と壊れているといって欲しがらなかった。

私の勤めは銀行だったので５カ月足らずしか勤めていないのに、たくさんの退職金をもらったが、父の会社はどさくさにまぎれてとうとう出なかった。売り食いで物価の高いのに引き揚げるまで１年近く、今考えてもよくやってきたと思う。

こんなこともあった。終戦翌年の５月の初めだった。中国人が来て３日のうちに家を明け渡せというのだ。反抗もできず近所の座敷を借りたが、他を探して引っ越した。その度にだんだん道具も減ってしまい不自由な生活になったが、いずれはリュック一つに一人１０００円しか持てないということで欲もなかった。

しかし子供のころの写真だけは買えないからと、アルバムからはがして手分けして袋に入れ持ち帰ることにした。

昭和２１年６月４日、いよいよ長年住みなれた奉天ともお別れの日がきた。北奉天駅に集合して石炭を積む無蓋車にすし詰めにされた。のんきな人は鶏の丸焼きを美味しそうに食べていたが、私はトイレがないので飲まず食わずを心がけた。少し動いては止めるのでお金を出し合って握らせれば動くという汽車で、やっとの思いで葫蘆島に着いたのは奉天を出て３日目だった。二泊してから背中にＤＤＴをふりかけられ、持ち物の点検をすまして乗り込んだ船は上陸

用船艇のＱＯ８９号だった。鉄板の床の一畳くらいの広さを５人分の席としてやっと落ち着いた。ああこれで日本に帰れるのだ…。

午後２時出港。いろいろな思い出を残し、もう二度と来ることもないだろう大陸よサヨウナラ。涙でかすんだ大陸がだんだんと小さくなっていく。内地ではどんな苦労が待っているかしれないが、一応一家５人そろって帰れる幸せを胸に抱いて一路、故国日本に向かったのだった。